

幻住庵の記

芭蕉艸

「幻住庵の記」は「おくの細道」の旅の翌年、松尾芭蕉が47歳の時（元禄3年（1690年）4月6日～7月23日）に、主として「幻住庵」で執筆されたものです。ここでの生活の様子や、それまで辿ってきた芭蕉の俳諧道への心境などを述べたのが「幻住庵の記」であり、「おくの細道」と並ぶ俳文の傑作とされています。ここに記載するものは、「元禄初版本『猿蓑』所収より翻刻」で、大津市観光課が発行したパンフレットによります。

石山の奥、岩間のうしろに山あり、^{こくぶやま}国分山といふ。そのかみ国分寺の名を伝ふなるべし。ふもとに細き流れを渡りて、^{すみび}翠微に登ること^{さんきよく}三曲二百歩にして、八幡宮たたせたまふ。神体は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ忌むなることを、^{りやうぶ}両部光をやはらげ、^{りやく}利益の塵を同じうしたまふも、また貴し。日ごろは人の^{まう}詣でざりければ、いとど神さび、もの静かなるかたはらに、住み捨てし草の戸あり。^{よもぎねざさ}蓬根笹をかこみ、屋根もり壁おちて、^{こり}狐狸ふしどを得たり。幻住庵といふ。あるじの僧なにがしは、^{すがぬま きよくすあし}勇士菅沼氏曲水子の伯父になんはべりしを、今は八年ばかり昔になりて、まさに幻住老人の名をのみ残せり。

予また市中を去ること^{ととせ}十年ばかりにして、^{いそじ}五十年やや近き身は、^{みのむし}蓑虫の蓑を失ひ、^{かたつぶり}蝸牛家を離れて、^{あううきさがた}奥羽象潟の暑き日に^{おもて}面をこがし、^{たかすなご}高砂子歩み^{あらいそ}苦しき北海の荒磯に^{ことし}きびすを破りて、今歳湖水の波にただよふ。^{にほ うきす}鳩の浮巢の流れとどまるべき^{あし ひともと}蘆の一本のかげたのもしく、^{のきぼ}軒端ふきあらため、^{うづき}垣根ゆひそへなどして、卯月の初めいとかりそめに入りし山の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ。

さすがに春の名残も遠からず、^{なごり}つつじ咲き残り、^{やまふじ}山藤松にかかりて、^{ほととぎす}時鳥しばしば過ぐるほど、^{やど}宿かし鳥のたよりさへあるを、^{きつつき}木啄のつつくともいとはじなど、^{たましひ}そぞろに興じて、^ご魂、^そ呉・楚東南に走り、^{せうしやう どうてい}身は瀟湘・洞庭に立つ。山は^{ひつじさる}未申にそばだち、人家よきほどに隔たり、^{へだ}南薫峰よりおろし、^{うみ ひた}北風湖を浸して涼し。^{ひえ ひら}比叡の山、比良の高根より、^{からさき}辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、^{かさとり}釣たるる舟あり、^{きこり}笠取に通ふ木樵の声、^{をだ さなへ}ふもとの小田に早苗とる歌、^{くひな}螢飛びかふ夕闇の空に水鶏のたたく音、^{みかみやま しほう おもかげ かよ}美景物として足らずといふことなし。中にも三上山は^{むさしの}土峰の^{むさしの}倂に通ひて武蔵野の古き住みかも思ひ出でられ、^{い たなかみやま}田上山に古人をかぞふ。^{ささほ たけ}小竹生が^{はかまごし}嶽・千丈が峰・袴腰といふ山あり。黒津の里はいと黒う茂りて、「^{あじろも}網代守るにぞ」と^よ詠みけん『万葉集』の姿なりけり。なほ^{てうぼう}眺望くまなからむと、^はうしろの峰に^は這ひ登り、^{たな}松の棚作り、^{わら ゑんざ}藁の円座を敷きて、猿の腰掛と名付く。かの^{かいだう}海棠に^{いとな}巢を^{しゅぼほう いほり}営び、^{わうをう じよせん}主薄峰に庵を^{すあへき}結べる王翁・徐佗が徒にはあらず。ただ^{さんがん}睡癖山民と成って、^{さんがん}孱顔に足を^い投げだし^{くうざん しらみ}空山に^ざ虱をひねって坐す。たまたま心まめなる時は、谷の清水を汲みてみづから^{かし}炊ぐ。とくとくの^{しづく わ}雫を^{いちろ}侘びて、一炉の備えいと^{じぶつひとま}かろし。はた、昔住みけん人の、ことに心高く住みなしはべりて、たくみ置ける物ずきもなし。持仏一間を隔てて、夜の物納むべき所など、いささかしつらへり。

さるを、^{つくしこうらさん}筑紫高良山の僧正は、^{かも かひなにがし げんし}賀茂の甲斐何某が^{げんし}巖子にて、このたび洛にのぼりいまそかりけるを、ある人をして^{がく}額を乞ふ。いとやすやすと筆を染めて、「幻住庵」の三字を送らる。やがて草庵

かたみ
の記念となしぬ。すべて、山居といひ、旅寝といひ、さる器うつはもの たくはふべくもなし。木曾ひがきの檜笠
、
こし すがみの まくら
越の菅蓑ばかり、枕の上の柱にかけたり。昼はまれまれ訪とぶらふ人々に心を動かし、或あるは宮森みやもりの翁、
をのこ
里の男おのこども入り来たりて、「猪いのししの稻食ひ荒し、兔うさぎの豆畑まめぼたに通ふ」など、わが聞き知らぬ農談、
は
日すでに山の端にかかれば、夜座静かに、月を待ちては影を伴ひ、燈火ともしびを取りては罔両まうりやうに是非を
こらす。

かく言へばとて、ひたぶるに閑寂かんじゃくを好み、山野に跡を隠さむとにはあらず。やや病身、人に倦うん
で、世をいとひし人に似たり。つらつら年月の移り来し拙つたなき身の科とがを思ふに、ある時は仕官懸命
の地をうらやみ、ひと ぶつり
一たびは仏籬祖室の扉とぼそに入らむとせしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に
じやう らう
情じやうを勞じて、しばらく生涯しやうがいのはかりごとときへなれば、つひに無能無才にしてこの一筋につな
がる。「楽天らくてんは五臟ござうの神を破り、老杜らうとは瘦やせたり。賢愚けんぐ文質ぶんしつの等ひとしからざるも、いづれか幻まぼろしの住
みかならずや」と、思ひ捨てて臥ふしぬ。

しい なつこだち
先づ頼む椎の木も有り夏木立